

2021 年度 琉球弧研究支援 報告書

1、研究の目的

本研究では、なぜ中国と琉球との間に「冊封・朝貢関係」が築かれることになったのか、中琉関係の大前提である歴史的背景についてまとめていきたい。その後で、本研究の主題である「進貢貿易」について研究したいと考えている。

現在、進貢貿易に関する研究は中国と日本において非常に盛んであり、その研究蓄積は豊富である。しかしながら、進貢品に関する研究はほとんど行われていない。そこで筆者は、そもそもなぜ中国と琉球との間で物品の贈与が行われるようになったのか、という点に着目し、中国と琉球との間を往来した物品に焦点を当てて研究を行う予定である。赤嶺守氏監修の『中国と琉球人の移動を探る一明 清時代を中心としたデータの構築と研究』（彩流社、初版 2013 年）などの研究データを踏まえつつ、琉球の外交文書集である『歴代宝案』を利用し、自身で新たなデータベースを作成し、物品の内容やその時代の変遷を探り、当時の中琉間においてなぜその物品がやり取りされたのかを明らかにし、その背景として時代ごとの中琉関係について探っていきたい。

2、進貢品の分析について

清代、琉球の進貢貿易における諸制度は明のそれを踏襲している。しかし、進貢品として琉球から清朝皇帝に進呈される礼物は、進貢の目的によって品目が異なっている。以下、清代に琉球国王から皇帝へ進呈された進貢品についての分析を試みたい。

通常、進貢品として皇帝に進呈されたのは、主に次の 24 項目である。馬、刀剣、馬鞍、金銀粉匣、金銀罐、摺扇、硫黄、貝、螺殻、煉熟白剛錫、赤銅、蘇木、胡椒、香木、烏木、丁香、土絲綿、土苧布、蕉布、糸煙、圍屏紙、護壽紙、金彩書圍屏、磨刀石。

一方、琉球の進貢に対して、清朝皇帝から琉球国王や王妃へ下賜された返礼品は、絹織物や磁器などであった。『歴代宝案』によると、常例進貢の貢物には硫黄、馬、海螺殻、紅銅、煉熟白剛錫などがある。明代初期から進貢された硫黄の数量は生硫黄2万斤であったが、『歴代宝案』によれば、明末崇禎 11 年（1638）に煎熟硫黄1万 2,600 斤に変化している。明清交替後、清朝への貢物として煎熟硫黄1万 2,600斤が引き継がれた。明代以来の常例貢物である馬は清代初期にも進貢されていたが、康熙 20 年（1681）に皇帝の諭旨により糸煙と併せて免貢になっている。この馬の免貢の諭旨に対し、琉球は馬の代わりに紅銅 3,000 斤に改貢（変更）している。以後、紅銅 3,000斤は常例進貢の貢物として定着するようになった。また、康熙 29 年（1690）までは、進貢年ごとに海螺殻 3,000 個ずつを進貢していたが、康熙 30 年には海螺殻の免貢を命じられている。この海螺殻の免貢に対して、琉球は煉熟白剛錫 1,000斤に改貢して献上している。このように、明朝以来の常例進貢品が清朝によって固辞された場合、琉球はその項目を削除するのではなく、代替品を用意して進貢し

ていたことが分かる。結果的に、康熙 31 年以降の常例進貢物は、煎熟硫黄1万 2,600斤、紅銅 3,000斤、煉熟白剛錫 1,000斤が定例となった。

とはいえ、これらの常例進貢品はすべて琉球の自国産という訳ではなかった。中には、煎熟硫黄のように、琉球王国が領有する硫黄島で採掘されたものもあるが、それ以外は薩摩を経由して調達されていた。琉球産ではない銅や錫が清朝に進呈されていた理由は、清朝の宮廷内の装飾品に使用する材料として、清朝側の需要が高かったためである。

次に、常例進貢品である硫黄・紅銅・煉熟白剛錫について概要をまとめてみたい。

(1) 硫黄

煎熟硫黄は琉球王国の硫黄島で採掘し加工されたもので、正貢品の中で唯一の本国産である。硫黄は活火山から放出されるガスに含まれる硫黄成分が空気中で冷やされて凝結することによって生じる。このため、純度の高い天然硫黄は、日本・琉球・台湾・東南アジア島嶼など環太平洋火山帯沿った地域で産出される。これに対して、活火山がほとんどない中国では天然硫黄の産出は乏しい。とはいえ、硫黄は火薬など火器の製作には欠かせない原料ともなるので、戦争など争いの続く明・清朝において、硫黄は非常に重宝された重要物資であった。その需要は清代に入っても変わらず、琉球は生硫黄を加工する技術を習得しながら、餅状にして運搬しやすい形にし、毎回の進貢で清朝に進呈していた。清代の档案資料によれば、福建到着後、福州で荷下ろしした硫黄は北京へは運ばず、福建の藩庫（地方行政の倉庫）で保管されていた。

(2) 赤銅

赤銅は硫化物または酸化物銅鉱石から製錬された純銅であり、鑄銭や銅器物の製造などにも利用することができる。赤銅は硬度が低いですが、叩くだけでいろいろな道具や装飾品を作ることができる。この赤銅は、康熙 21 年（1682）から常例進貢品として清朝に進貢されるようになった。赤銅を進貢する代わりに、それまでの常例進貢品であった琉球馬の供給を停止させる論旨が康熙帝から出された。実はそれ以前に、琉球からは複数回にわたって赤銅が進呈されている記録がある。しかしいずれも「加貢」という通常の進貢品に追加するという名目で、進呈回数や数量は不定であった。具体的には、康熙 5 年（1666）は 600 斤、7 年は 600 斤、11 年は 1,000斤、17 年は 1,000斤、19 年は 1,000斤であった。しかし、赤銅が琉球馬に代わって正貢品になると、その数量は 3,000斤に増量された。

(3) 煉熟白剛錫

煉熟白剛錫は、康熙 31 年（1692）以降、海蝶殻に代わって正貢品となったものである。もともとは琉球側の意向であった。近年、中国第一歴史档案馆が整理した『清宮内務府奏銷档』には、「尚お未だ進呈せざる所有の貢物の内、硫黄一万二千六百觔を除き、已に例に照らして福建省藩庫に留貯せしめ、工部より取用せしめよ。其の紅銅三千觔・白剛錫一千觔は応に内務府に交して査収せしめるを請う。」と記載されている。つまり、正貢品三種のうち、硫黄だけは福建省内で保存し、残りの赤銅と煉熟白剛錫は、進貢使節団によって北京まで運ばれ、北京到着後、その連絡を受けた礼部が進貢使節の宿舎である会同館に役人

を派遣して受領させ、礼部が皇帝に奏聞（報告）したのである。礼部を經由して最終的に進貢品は工部や内務府などに分配されたのである。琉球から進貢した煉熟白剛錫は、内務府に届けられた後、清朝の皇室御用達の錫器の材料として使用されたと推測される。

3、おわりに

琉球は、三山時代であった洪武 5（1372）年に初めて明朝と正式な外交関係を樹立して以来、光緒 5 年（1879）の「琉球処分」に至るまで、約 500 年にわたり中国（明・清）と宗属関係を維持してきた。朝貢体制は過去の東アジア地域における独特の国際秩序であり、その最も主要な特徴は「中国」を中心として、周辺の夷狄諸国が冊封を受け入れたことである。進貢品について、清朝は明朝と同じように貢期（進貢時期）や進貢品の種類・数量まで明確に細かく規定しているが、進貢品目については変遷が見られた。その理由として、もともと騎馬民族である満洲人にとって運搬用の馬は必要なかったのかも知れないし、沿海の住民ではない彼らには海螺殻の使い道はなかったのかも知れない。ともかく、この 2 品目がそれぞれ赤銅と錫に変更されたが、それは琉球からの申し入れによるものであった。清朝は琉球の進貢の負担を少しでも軽減しようと、不要な馬と海螺殻の進貢を免除し、代替品は不要としたが、琉球にとってそれは負担が軽くなるどころか、かえって中琉交流に痛手を負うものと捉えられ、免除されることに琉球は必死で抵抗した。その結果、代替品として代わりに進呈されたのが赤銅と錫であり、どちらも清朝での需要に適合していたことから康熙帝は進呈を許可し、以後、定例化することになった。このように、進貢は琉球王国にとって最大かつ最重要な外交手段であり、それを維持することは琉球の死活問題であった。そのため、品目一つの変更に際しても、琉球は必死で抵抗したり代替案を探して進呈していた。たとえそれが自国で調達できないものであっても、琉球を支配する薩摩を逆に利用して調達していたのは、琉球が王国を維持する知恵だったのかも知れない。

本稿では、清代の正貢品である三つの進貢品について分析したが、そこから分かったのは、それぞれの進貢品について、項目が決定するまでには琉球側の様々な葛藤や外交戦術があったということである。琉球を懐柔するために項目を減らそうとする清朝側と、項目が減らされては進貢貿易が成り立たないと必死に食い下がる琉球側とで、双方の朝貢体制に対する捉え方に違いが見えて興味深い。琉球は物品調達に、薩摩との関係をうまく利用するなど、琉球のしたたかな戦略もうかがい知ることが出来る。このように、進貢品の変遷過程やその背景には、当時の中琉両国の需要と供給が関係しており、そのバランスは琉球を取り巻く薩摩や中国との外交といった政治状況と密接に拘わっていることが分かる。

4、先行研究・参考文献

- ・喜舎場一隆「明末・清初の朝貢と薩琉関係」『近世薩琉関係史の研究』国書刊行会、1993 年
- ・朱徳蘭「十五世紀朝貢輿琉球的亞洲外交貿易」『第二屆琉中歴史関係国際学術会議論文集』

琉中歴史関係国際学術会議実行委員会、1989年

- ・田名真之「北京故宮博物院所蔵の琉球貢文物について」『第十屆中琉歴史関係学術会議論文集』中琉文化経済協会、2007年
- ・陳碩炫「清代琉球使節の進貢日程に関する研究」琉球大学大学院博士学位論文、2008年
- ・丁春梅、林京搭「清政府封琉球朝貢貿易政策初探」『海交史研究』2007年第1期
- ・辺土名朝有『琉球の朝貢貿易』校倉書房、1998年
- ・真栄平房昭「琉球の進貢貿易論をめぐる一視点—貿易品の需要と消費の接点を探る」『沖繩文化研究』25、法政大学沖繩文化研究所、1999年
- ・松浦章『清代中国琉球貿易史の研究』榕樹書林、2003年
- ・宮田俊彦「清朝の招諭と琉清貿易の盛況」『南島史学』7、南島史学会、1975年
- ・頼正維「清康乾嘉時期的中琉貿易」『中国社会経済史研究』2005年第3期
- ・頼正維「清代中琉冊封貿易述略」『寧徳師專学報（哲学社会科学版）』2005年第2期
- ・李金明「明代中琉封賞関係:是“藩属”抑或“貿易伙伴”」『第十二屆中琉歴史関係国際学術会議論文集』北京図書出版社、2010年
- ・劉蘭青「清代中琉の封貢と貿易の関係について」『第三屆琉球・中国交渉史に関するシンポジウム論文集』沖繩県教育委員会、1996年
- ・『歴代宝案（校訂本）』（一）～（十五）、沖繩県歴代宝案編集委員会、1992～2016年

5、指導教員コメント

毛さんは、本研究で分析した常例進貢（通常の進貢／2年に1回）の他に、特殊進貢と呼ばれる①「慶賀」（皇帝の即位や誕生日を祝う）、②「冊封謝恩」（琉球国王への冊封の御礼）、③「御書謝恩」（皇帝から下賜された四字の扁額を頂いた御礼）での献上品についても分析を行っている。しかし、今回は字数制限の関係で常例進貢品のみでの報告となっている。

「進貢貿易」という研究テーマは、琉球史研究や中琉交流史研究を志す者が必ず学習するテーマではあるが、それは「進貢貿易」なしには琉球王国は成立せず、琉球史も存在しなかったからだといえる。そのため、毛さんが冒頭で述べているように、「進貢貿易史研究」を行おうとすれば、その研究蓄積は膨大であり、後学が研究する隙はないようにも思える。しかし、その隙を毛さんなりに上手く見つけてくれたのが、この「進貢品に見る中琉関係の変遷」という視点である。言われてみれば、なぜ琉球がそれらの物品を中国皇帝へ献上していたのか、なぜ中国皇帝はそれを欲しがったのかについては不明な点が多い。例えば、琉球が明朝に琉球馬を献上し続けた理由について、おおよそのところ、漢民族国家の明朝では運搬用として頑丈な琉球馬が必要であったが、騎馬民族国家の清朝では、自分たちの馬よりも背丈が低くやや胴長短足である琉球馬は必要なかったとされている。しかし、史料には馬の献上を取りやめた明確な理由はなく推測の域を出ないが、それでも清代になって新たに加わった赤銅と錫について、なぜ清朝が必要としたのか、なぜ琉球がそ

れを献上したのかを検討することで、馬の提供を取りやめた遠因が見えてくるような気がした。

そもそも琉球では、進貢のことを「進貢貿易」と呼び慣わしているが、中国ではあくまで「朝貢」であり、そこに「貿易」の概念はない。しかし琉球にとっては、北京にいる中国皇帝に進貢品を献上して終了するのではなく、福建に滞在して、王府予算と薩摩藩経費を使って中国商品を購入することも国家運営の大事な任務であった。こうした双方の捉え方の違いがより顕著に示されたのが、毛さんの指摘した、馬と海蝶殻を赤銅と錫に変更するという琉球の外交戦術であった。中国皇帝は、その二項目を免除（削除）することで琉球への懐柔を示したつもりが、琉球にとっては、進貢が減少し、中国との外交関係が希薄になることを懸念させる恐ろしい提案として受け止められた。そのために琉球は必死で代替案を提示したのだが、その代替品が琉球では産出せず、薩摩を経由して調達されていたにも関わらず、これまでの「加貢」（通常の進貢にプラスした貢品のこと）でまずまずの手応えを得ていた赤銅と錫を候補に選び、常例進貢としての項目数の維持を図ったのである。

このように、1つの物品や1項目に関しても、決して“テーゲー”に判断することなく、琉球王国としての命運を懸けて必死に対応していた様子を見ると、500年に及ぶ「進貢貿易」が、およそ500年間の中琉交流史を支えた最大の要因であったことが頷ける。

まだまだ研究の余地はあるが、毛さんの進貢品の分析研究は今後の「進貢貿易研究」に一石を投じる重要な研究だといえる。

(前田舟子)